

奨励賞

【共通テーマ作品】

『デジタル時代』真つ只中に

早瀬ふみ子

わたしは六十六歳の時から介護保険のユーザーになりました。介護を人に頼むのではなく自分自身でできることはないのだろうかと考え、ネット等で調べました。その時、ケアプランを自己作成できることを知りました。そこで、その旨を地域のケアマネージャーや役所の方に相談すると、それも可能だとの返事を得ました。初めてのこともあり、暗中模索の作業に四苦八苦ではありましたが、自分自身のことを自分で決めるという楽しさもありました。何よりも同じ志を持つ仲間達とネットで知り合えたことがわたし自身力になりました。

介護保険の認定更新の時期を迎えた今年、例年と違いました。それは新型コロナウイルス感染症に翻弄された三年間が大きく影響しています。感染症の二類から五類

への移行が行われ日常が戻ってきたと言えども、それは以前のものとは全く異なっています。わたしも『戻してはいけない日常』もあると気づいていますが、そうした環境に慣れずに、まだ過ごしているというのも本当のところでは。

ケアプランの作成には、サービス担当者会議を経なければなりません。コロナ禍の最中は、ケアプラン作成に必要なそのサービス担当者会議を、紙面会議で済ませたこともありました。今回はどうしようかと考えていた時、会議をオンラインで試みることはできないだろうかと思いつきました。担当者の皆さんの顔を見ながら、自分の思いも届けることができる、そんなツールが、わたしの身近にあったことに改めて気がついたので。

会議は三十分くらいで終わるのですが、それぞれの事業所（通所型リハ・福祉用具事務所・薬局・地域包括センター・役所）から、来てもらわなければなりません。それに、病気のため半身麻痺が残るわたしは、会議に付随する書類を持って、会場へ行く困難さもありません。それがパソコン一つあれば解決できるのです。しかも画面を

通して話せるので、何らリアル会議と変わらないのです。余談ですが、喉が乾いたら用意したお茶を飲むなど、個人的な自由さえ利きます。リアル以上にオンライン会議の良さが感じられる気がしました。

オンライン会議を提案したところ、後押ししてくださるような感じばかりで、事業所からの反対意見というものはありませんでした。そこで報告書を用意し、AIでの自動読み上げを設定。妹と事前にZOOMを使った練習もしてみました。顔は見えるが声が出ず、ミュートになっていることに気づくなど初めてするホストならではのハプニングはあったものの、どうにか使える自信ができて、当日を迎えることになりました。ところが、当日の会議においてもトラブルが発生。わたしの方のマイクの声が小さいなどを指摘されました。今回はわたしがホストであり、細心の注意が必要なのだと痛感させられました。しかし、同時に改善のアドバイスも受け、次に繋がる意欲ともなりました。今はオンライン会議に挑戦して本当に良かったと感じています。

我が国では2025年問題という大き

な課題があると聞きます。介護現場でも、人材不足のために、「介護サービスがあっても、使えないサービス」になってしまわないかと言われるものです。今回のオンライン会議を通して、わたしはデジタルの可能性を身近に感じました。介護現場でも、もっとデジタルの活用で、働く人の大変さを軽減できることや現場の方の知識の蓄積が活かされていくことが期待されます。

わたしは高齢者で、なかなかデジタルを使いこなすというわけにはいきません。しかし、日々新しくなる技術に心躍ることもあります。足腰の弱い老人ではありませんが、反面、十分な時間もあります。デジタルを活用するメリットも多いのではないのでしょうか。デジタル難民として隅に追いやられてしまうのではなく、これからもどんどんデジタルを活用していくために公の場にも使いやすい機器を置いていただき、その使い方について学ぶ機会が、高齢者にもあればと思います。誰もがアクセスできるよう、ちょっとだけ後押ししてくれる仕組みを、行政にも求めたいと思います。